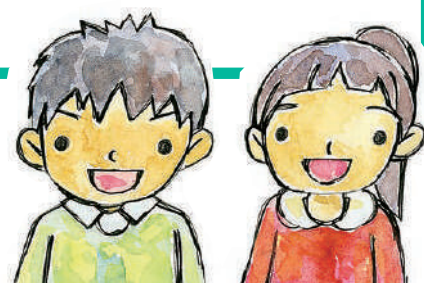


9 いし ぶん か み らい 石文化を未来に!



? どのようにしたら
いし ぶん か し 石文化をみんなに知ってもらえるかな?

てい あん 提案しよう!



い ざん ち い き れ き し て き み り ゅ く と く し ゅ く と お ぶん か でん どう
日本遺産とは地域の歴史的な魅力や特色を通して日本の文化・伝統
を語るストーリーを文化庁が認定するものです。
へい せい ねん が つ に ち てい し ゅ つ し ゅ き ゅ く あ ゆ も の が た り
平成 28 年 4 月 25 日、小松市が提出した「珠玉と歩む物語」小松
〜時の流れの中で磨き上げた石の文化〜が認定を受けました。

発 行：小 松 市 (観光文化課)
〒923-8650 小松市小馬出町 91 番地
Tel (0761) - 24 - 8130

発行年月：令和 8 年 7 月 (第 8 版発行)
協 力：小松市教育委員会

 日本遺産魅力発信推進事業

年	組



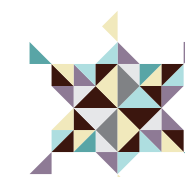
たん けん 探険!

こまつ の
いし ぶん か 石文化

小松市「石の文化」資料集



小 松 市



珠玉と歩む物語
こまつ
日本遺産



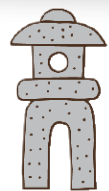
JAPAN HERITAGE
日本遺産

1 石文化を探してみよう！



小松市イメージキャラクター「カブッキー」

みんながすんでいる町には、石でできたものがいろいろあるね
どんなものがあると思う？
町に探しにでかけよう！



学校の校門や
すんでいる家のかべ！
おじぞうさん！

おはかや神社、
あと、お茶わんやお皿も！
石で作られたものって
たくさんあるね！

他にも遺跡や大昔に作られた出土品や、
みんなが知っている九谷焼も
石でできているよ！石でできた物には
それぞれ意味があるんだ！

どんな意味があるのかな
何のためにつくられたものなのかな？



2 小松の石文化

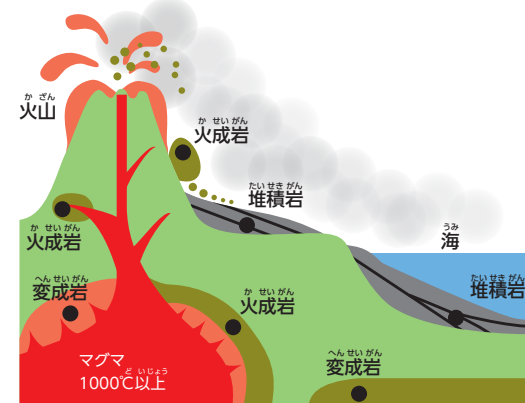


今からおよそ2500万年前まで、日本列島はユーラシア大陸の一部でした。その後、大陸の東側が裂けて日本列島の元になる部分が離れ始めました。2000万年前ごろには、大規模な火山活動が起きて溶岩や火山灰が大量に噴出しました。火山灰は降り積もって固まり、凝灰岩となりました。小松市の地下には、緑色凝灰岩が大量に分布し、ここから金や銅などの鉱石をはじめ、メノウ、水晶、碧玉などの美しい鉱物、良質な凝灰岩の石材、九谷焼の原料となる陶石が産出します。

鉱物と岩石

岩石には3つのでき方がある

鉱物は原子が規則的に並んで結晶をつくり、均一の成分をもつ自然にできた物質のことです。一方、岩石は複数の鉱物が集まったもので、マグマが固まった火成岩、砂や泥などが固まった堆積岩、温度や圧力で岩石が変化した変成岩に分けられます。



知ってる？ 緑色凝灰岩 (グリーンタフ)

変質して緑色をおびた凝灰岩のこと。日本海側を中心に広く分布し、その分布域に小松市も含まれています。



小松の石文化年表

およそ
2000万年前

地殻変動により火山活動が活発になりました。火山の噴火によりさまざまな鉱物、岩石が生み出されました。

縄文時代、弥生時代
縄文時代には流紋岩の矢じりなどの石器が作られました。弥生時代になると、碧玉の管玉が盛んに作られ、全国に広がりました。

鎌倉～安土桃山時代
石積みのお墓、石灯ろう、石仏などのほか、アンカ、鉢などの生活用具にも凝灰岩が活用されました。

明治～大正時代
尾小屋鉱山、遊泉寺銅山が最盛期を迎えました。凝灰岩の石材も全国の有名な建物に使われました。

古墳～飛鳥時代
古墳時代には碧玉の精巧な彫刻を施した腕輪が全国に広がりました。また、古墳の石室に良質な凝灰岩を切り出し利用しました。

江戸時代
加賀藩の藩主・前田利常が小松に隠居し、まちづくりを始めました。小松城の石垣や堀、河川の護岸などに凝灰岩が使われました。

現代
凝灰岩の石材を使った塀や橋などが造られ、九谷焼の原料も小松でとれる石です。今もさまざまなところで小松の石が使われています。

原始時代 古代 中世 近世 近代 現代

3 かがや 輝く小松ブランドの誕生 たんじょう



小松市内の縄文時代の遺跡からは、市内で採れた火山岩の一種の流紋岩で作った矢じりなどの石器がたくさん見つかっています。また、市内には、弥生時代から古墳時代に活用された碧玉産地があり、その碧玉を原料に管玉を製作した遺跡がみられます。質の高い地下資源が、その時代の最先端の技術によって加工され、アクセサリーとして日本列島各地の豪族・有力者たちの手にわたります。

よう か いち じ かた い せき や よ い たま 八日市地方遺跡と弥生の玉づくり

モノづくりの大きなムラ

JR小松駅の東側に広がる八日市地方遺跡は、面積が10万平方メートルを超える、巨大なムラです。北陸で本格的な稲作がおこなわれる弥生時代中期を代表するムラでした。ここで発見された土器は、「小松式土器」と呼ばれ、早くから注目されていました。

たくさん出土品の中に、ヒスイ製勾玉、碧玉製管玉、農具や容器などの木製の道具が大量にあります。さらに、これらの加工中のもの、加工するための道具も見つかり、さかんにモノづくりをしていたことがわかっています。



よう か いち じ かた い せき ちょうさ ふうけい 八日市地方遺跡の調査風景

はってん 発展するムラ

たくさん作られたヒスイ製勾玉や碧玉製管玉は、西日本各地のムラの指導者の手にわたります。一方、各地からは貴重な鉄の道具や進んだ技術がどんどん入ってきました。八日市地方遺跡は、日本列島各地のヒトやモノ、文化が交差するムラとして次第に成長していきました。

たま 玉にどうやって穴をあけたのだろう？ あな

よう か いち じ かた い せき 八日市地方遺跡

つく へきぎよく で作られる碧玉

せいくだたま おお 製管玉の大きさは

ちようけいやく あな 直径約2ミ、穴

は1ミと、小さく

見事な仕上がりで

できています。半

分に割れた管玉

かんざつ を観察すると、

あな 穴あけ用に利用した細い針状

の石で、3分の2ほどあけた

後、反対側からあけて貫通さ

せたことがわかります。

しかし、この細い針状の石

を使って、どうやって穴をあ

けたのかは、いまだに解明さ

れていません。



へきぎよく あな 碧玉に穴をあける作業（想像図）



いしばり 石針



くだたま 管玉にはこんなに小さな穴があいています



くだたま 管玉断面

あら けん い うで わ さん ち 新たな権威のしるし、腕輪の産地に

古墳時代になると、沖縄など南の島々の貝の腕輪をモデルにした碧玉製の腕輪が登場します。実用品というよりは、新たな権威のしるしとして、大和地方を中心に各地の豪族に広がりました。碧玉で精巧な腕輪をつくるには、腕を通す部分のくり抜きや彫刻が必要となります。小松産の碧玉は、そうした細かな加工にも適していたようです。



まい ぞう ふん か ざい 小松市埋蔵文化財センターの人のお話

かた やま づ たまつくりい せき 片山津玉造遺跡とは

か が し かた やま づ まち うわ の だい ち てんざい 加賀市片山津町の上野台地に点在するかた やま づ たまつくりい せき 4世紀ごろの古墳時代前期に、小松産の碧玉を利用した腕輪や管玉、容器を作った全国でも有数の玉づくりの遺跡です。遺跡からは、数多くの加工途中のものや加工道具がみつかり、



へきぎよく ちひょう で 碧玉が地表に出ているようす

な た ぼ だい たき が はら へきぎよく さん ち 那谷・菩提・滝ヶ原の碧玉産地

玉づくりに利用された良質の碧玉原産地として知られているのは、全国で4カ所しかありません。なかでも、小松市の南西に位置する那谷・菩提・滝ヶ原地区は、弥生時代中期から古墳時代の前期にかけて活用された最大規模の碧玉産地です。人々は小松産の良質の地下資源を、当時の最先端技術を使って加工し、アクセサリーとして全国に届けていました。



まめ ち しき 豆知識
よう か いち じ かた い せき しゅつ ぶ りん 八日市地方遺跡出土品＝出土品のうち1020点が国の重要文化財に指定されています。



まめ ち しき 豆知識
へきぎよく せきえい いっしゆ あか みどりいろ ふ、とうめい こうぶつ やよい じ だいい たま ざいりょう つか 碧玉＝石英の一種で、赤や緑色の不透明な鉱物。弥生時代から玉の材料として使われました。流紋岩＝粘り気の強いマグマが地表付近で冷えて固まった岩石です。

4-1 凝灰岩切石の利用（はじまり）



石材は、これまで刃物などの道具や、アクセサリとして利用されてきました。岩石を切り出す道具や技術が進み、飛鳥時代には切石による壁や天井をもつ横穴式石室墳が出現します。小松では質の良い凝灰岩が採れたこともあり、早くから凝灰岩切石の利用がはじまりました。

河田山古墳群の石室

河田山古墳群は、小松市の東部丘陵地にあった総数65基を数える加賀地区最大級の古墳群です。河田山での古墳造りが終わり、およそ150年後の飛鳥時代に、切石積み横穴式石室を持つ方墳3基が突然出現します。地元凝灰岩の切石を使用し、「鍵手積み」という高度な技術によって積みられました。12号墳は天井がアーチ型に復元され、国内では他に例がありません。朝鮮半島の王墓の影響とも考えられています。



河田山古墳群12号墳の石室のようす

石材産地の増加と石造物

鎌倉・室町時代になると、仏教の教えが武士や農民まで広まりました。武士などの有力者は、死後に極楽浄土へ行くための良い行いや先祖の供養として、墓地に石塔を立てるようになります。石塔には、地元の石材が使われており、石を加工する職人がいたことがわかります。



高度な鍵手積みの技術で積まれた石材



滝ヶ原石で造られた多層塔

知ってる?

中世那谷寺の貴重な石

戦国時代に周防や長門（今の山口県）を治めていた大内氏が、中国交易のために那谷寺のメノウを欲しがったという記録が残っています。1度目は求めに応じましたが、2度目は貴重なものだとして断ったということです。当時から、那谷寺のメノウは広く知られていたのです。



まとめ知識

切石＝使い道に応じてさまざまな形に切った石材のことです。
鍵手積み＝石材の角を鍵形に欠き、石材同士が密着する面を増やしてズレを防ぐ方法です。

コラム

「石文化」たんけん新聞

芦城公園はお城だった



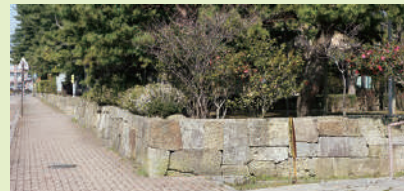
絵図に描かれた三の丸の様子（江戸時代後期）

芦城公園は、江戸時代の小松城の一部で、当時「三の丸」と呼ばれていたよ。ここには、お城に勤めた武士の家があったんだ。このお城のお殿様は、前田利常公。



公園の利常像

公園で探そう！

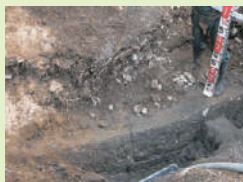


小松城石垣の石材を再利用した公園外周



芦城公園の茶室に置かれた戸室石

公園で使われている石の中には、当時お城で使われたものもあるよ。見つけた石が、もともと何に使われていたのか調べてみよう。戸室石という金沢から運ばれた石は、お殿様がくらしした御殿や趣味の茶室など、とても重要な場所に使われていたと考えられるんだ。



調査で石垣が見つかったところ

むかしの芦城公園 正面入り口と橋・石垣



江戸時代にお城だった証拠は、地面の下にもあるんだ。公園の南側入り口は、当時はお城の正面入り口だったんだ。古い写真からは、堀に架かる橋の様子が見えるね。今は見えないけど、地面の下には大部分が残っているよ。
写真には、今も芦城公園入口にあるタブの木と石垣も写っているね。この石垣は当時のものがそのまま残っている可能性があるよ。

地下にもあるよ

見つけた石をどうやって調べたらいいの？

博物館の学芸員や、埋蔵文化財センターの専門職員に聞いてみよう。



4-2 凝灰岩切石の利用（建物への使用）



今からおよそ400年前に始まった江戸時代には、小松は加賀藩に含まれており、前田家が治めていました。3代目の前田利常は寛永16年（1639）に藩主を息子にゆずり、小松へ隠居しました。城の改修と城下町の整備をきっかけとして、切石を使った建造物が普及していきました。

小松城の石垣

小松城は、江戸幕府の「一国一城令」によって廃城となっていました。それを幕府から特別に許可を得て、隠居城として大改修しました。まるで新しい城を建設するような大工事で、多くの建物が建てられ、川のような幅の広い堀も造られました。そのため、建物の土台や堀の岸が崩れないように石垣を築いたことから、たくさんの石材が必要となりました。小松高校の敷地にある本丸櫓台石垣は、現存する数少ない石垣の一つです。鵜川石など小松の石切り場から切り出された石材と、金沢から船で運ばせた戸室石を組み合わせで積んでいます。不ぞろいな形の切石を合わせ、色の配置を考えて積んだ美しさも意識された石垣です。



小松城本丸櫓台の石垣

多用された石材

石垣は、城の建設だけでなく、水路の護岸や橋など城下町の建設にも使用されました。蔵の土台や配水管、井戸枠などにも凝灰岩が使用され、アンカや石鉢など日用品も普及しました。小松では、その後25カ所をこえる石切り場が開かれていきます。



凝灰岩製のアンカ（城下町跡からの出土品）

那谷寺の棟石

那谷寺は、自然の岩山を信仰する古くからある寺院です。戦国時代に戦火にあい荒れた状態だったのを、小松城に隠居した前田利常が復興しました。今も残る建物の本堂・護摩堂・鐘樓の屋根には、地元の凝灰岩で造られた棟石が使われています。本堂では、建物の重さを支える礎石や柱の一部に硬い戸室石が使われています。



那谷寺鐘樓の棟石



那谷寺の鐘樓

小松の町を彩る黄色の石

小松では、昭和の初めに2度の大火がありました。昭和5年（1930）3月28日の橋北大火では、732戸が焼失し、家を失った人は約2500人でした。昭和7年（1932）10月22日の橋南大火では、1203戸が焼失し、家を失った人は約6000人にのぼりました。この時、観音下石でできた蔵が焼け残りました。この石が熱に強いと人気となり、復興の際には、蔵や塀に盛んに使われました。このため現在でも、小松の町中では、観音下石の黄色みがかった建造物を多く見かけることができます。



橋南大火で焼け残った石蔵

生活に密着した石橋



滝ヶ原町の西山橋

滝ヶ原町にある石橋は、本州ではめずらしい半円形のアーチ型をしています。町内に5基、となりの菩提町に1基残っています。地元の滝ヶ原石を使い、明治時代後期から昭和時代初期にかけて建造され、過去には少なくとも11基ありました。

知ってる？ 護岸工事に使われた石製品

安宅湊の積荷の記録には、石で作られた製品がたくさん載っています。当時の小松には、豊富な石材と、それを加工する人や技術があったことがわかります。大きな円筒形の石を丸くくりぬいた「たんころ石」もその一つです。内側に石や砂をつめて、川の護岸を固めるのに使いました。安宅や今江の川では、今でもこの「たんころ石」の風景を見ることができます。



石橋群は、山村に暮らす人々が、生活道路を確保するために架けた典型的なアーチ橋として貴重です。石材産地の山村生活と仕事に深く関わる石橋群は、文化を示す景観としても価値が高く、これからも残して行かなければなりません。



戸室石＝金沢市南東部の戸室山、キゴ山周辺で採れる安山岩の石材で、藩政時代から金沢城の石垣や兼六園の石橋、灯ろう、石塔などに使われています。



アンカ＝寝るときに足を温めるための道具です。容器の中に灰を入れて、中に小さな木炭を入れて使いました。鐘樓＝寺院で鐘をつるす堂のこと。かなつき堂ともいいます。

4-3 凝灰岩切石の利用（産業）



明治～大正時代になると、小松の石材は関東や関西にも運ばれ、様々な建築物に使われるようになりました。しかし、石に代わってコンクリートが使われるようになると、昭和30年ごろから、石切り場は減少していきました。現在市内で切り出しが行われているのは、滝ヶ原、大杉の2カ所です。

国府地域の石切り場

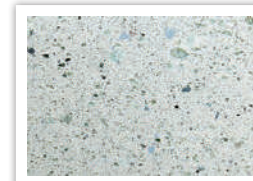
鶺鴒川、立明寺、里川など国府地域の丘陵地は、飛鳥時代の河田山古墳の石室から小松城の石垣、そして近代建築まで、長く利用されてきた凝灰岩の産地です。すでに江戸時代には、藩外へ売り出す商品として出荷されていました。建築だけでなく、火鉢など生活用品にも広く利用されました。トンネル状に切り出した後の横穴の総延長は、とても長くなっています。



鶺鴒川の表面

滝ヶ原の石切り場

滝ヶ原では、江戸時代の文化年間（1804～1818）以降に採掘が始まったといわれています。灰色から薄い緑色が特徴で、硬くて水に強い、建物の土台や棟石に利用されました。また、きめが細かく彫刻に向いていることから、灯ろう、鳥居、記念碑などにも使われました。この石は、山肌を横に掘り進む方法で採掘され、手掘りによる採掘跡を道路から見ることができます（坑内は立入禁止）。現在では、大型の電動ノコギリを使って切り出しています。



滝ヶ原石の表面

観音下の石切り場

観音下石は、黄色くて軽いのが特徴です。大正時代以降に、盛んに切り出されました。この石は、近年まで露天掘りで切り出されていました。熱に強い、石蔵や塀や門などに多く使われ、「日華石」という名で広く県外でも利用されています。代表的なものに、旧前田侯爵邸、旧甲子園ホテル（現在の武庫川女子大甲子園会館）などがあります。



観音下石の表面



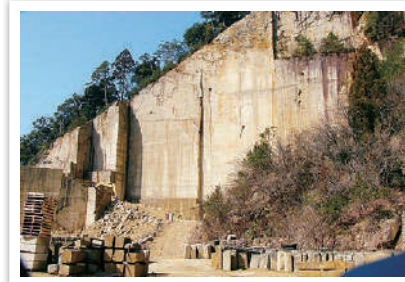
トンネル状の鶺鴒石切り場跡



滝ヶ原石の石切り場



石工道具



観音下石の石切り場

知ってる？

帝国ホテルに使われていたかも？（菩提石）

暗い赤褐色をして蜂の巣のような穴が見られる石を「菩提石」、別名「蜂の巣石」といいます。菩提町で産出していた非常に珍しい石です。かつて建築家フランク・ロイド・ライトが、帝国ホテルを設計した際に、探し求めた幻の石ともいわれています。



5 小松の鉱山



小松の山々には金、銅、亜鉛など豊富な資源があり、江戸時代から昭和の初めにかけて多くの鉱山が栄えました。中でも、尾小屋鉱山や遊泉寺銅山、金平金山は広く全国に知られるほどでした。閉山後も、そこで培われた「鉱業技術」は受け継がれ、小松の機械工業発展へとつながっています。

金平金山

明和元年（1764）に加賀藩の十村の石黒源次が発見し、安永元年（1772）から本格的に掘り始めました。寛政5年（1793）ごろまでの20年間に約234キロの産金があり、最盛期には100人以上が働くなど、加賀藩の財政を支える重要な鉱山でした。当時の様子は「加州金平鉱山図絵巻」（矢田四如軒）に残されています。明治以降は民間の経営となり、昭和46年（1971）に閉山となりました。



加州金平鉱山図絵巻（石川県立歴史博物館所蔵）

尾小屋鉱山

明治11年（1878）に銅鉱脈が発見され、明治14年（1881）元加賀藩の家老の横山家が経営をはじめ、本格的に採掘が行われるようになりました。大正8年（1919）には、鉱産物や人、生活用品を運ぶために、尾小屋と新小松駅の間を結ぶ尾小屋鉄道も開通しました。大正9年（1920）には、鉱夫の数も1500人を超え、銅の生産量も2276ト（全国8位）となるなど急速に発展しました。しかし、昭和46年（1971）に閉山に追い込まれ、その後、尾小屋鉄道も廃線となりました。



尾小屋鉱山

遊泉寺銅山

安永6年（1777）十村の石黒源次によって発見され、文化4年（1807）に本格的に採掘されるようになりました。明治時代以降、竹内明太郎の経営になると、欧米の先端技術を導入し、近代化が急速に進められました。明治40年（1907）には、小松と遊泉寺の間に鉄道もしかれ、大正5年（1916）には、従業員と家族をあわせ約5000人の鉱山町となりました。また竹内は「小松鉄工所」を開設し、青少年に科学工業技術を学ばせるなど、人材育成にも力を注ぎました。そのため、大正9年（1920）に閉山となった後も、機械工業の技術部門は「株式会社小松製作所」に引き継がれ、現在のコマツへと受け継がれています。



竹内明太郎

知ってる？

紫水晶

石英とよばれる鉱物で、結晶が六角柱のものを水晶と呼び、さらに紫色のものを紫水晶と言います。水晶学者の市川新松は遊泉寺産の紫水晶を研究し、明治41年（1908）に論文を発表しています。



豆知識

露天掘り＝トンネルのように掘るのではなく、地表から下に向かって掘る方法です。石＝屋根の棟に瓦のかわりに乗せる石製品で、市内にわずかに残っています。



豆知識

竹内明太郎（1860～1928）＝高知県出身の明治・大正期の実業家・衆議院議員。吉田茂元首相の兄。機械の世界トップメーカー「コマツ」の礎を築いた人物。「人創りこそ企業の礎、また国を興す礎でもある」との言葉を残しました。

6 九谷焼を支える陶石



九谷焼は、江戸時代のはじめに加賀の地で始まりました。九谷五彩（紺青・紫・黄・緑・赤）と呼ばれる色絵や、華やかな金彩・銀彩、赤絵・細字の細密表現など多様な技法に彩られたやきものです。明治時代には海外で「ジャパネクタニ」と呼ばれ、輸出品として高い人気を誇りました。その伝統は現在まで引き継がれ、石川県を代表する伝統工芸品となっています。この美しい現代の九谷焼を支えているのが、小松市の花坂町で採掘される「陶石」です。

九谷焼の始まり

江戸時代前期、加賀藩の支藩である大聖寺藩内の江沼郡九谷村で「陶石」が発見され、明暦元年（1655）ごろに色絵磁器が焼かれ始めたといわれています。これが「九谷焼」の始まりです。この窯は謎が多く約50年でとだえます。この時代に焼かれたものを「古九谷」と呼んでいます。約100年後の江戸時代後期になると、金沢の春日山窯をはじめとして、加賀藩内で窯が開かれ、再び磁器が焼かれるようになります。この時代のものを「再興九谷」と呼び区別しています。

本多貞吉が花坂陶石を発見

文化2年（1805）に、若杉村の十村をつとめ林八兵衛が窯を開きました。文化8年（1811）には、陶工・本多貞吉が近くの花坂村で良質な陶石を発見し、本格的な磁器生産がはじまります。



本多貞吉

この窯は「若杉窯」と呼ばれ、加賀藩の「若杉陶器所」として藩の保護のもと発展し、特産品を製造する窯として量産方式が取られました。しかし、天保7年（1836）に火災にあい、現在の小松市八幡に窯を移転しました。

現在でも、花坂では陶石の採掘が続いており、九谷焼の原材料として供給されています。その成分は石英・長石・セリサイト・カオリンで、焼かれた素地はやや灰白色を帯びた色をしています。



花坂陶石山

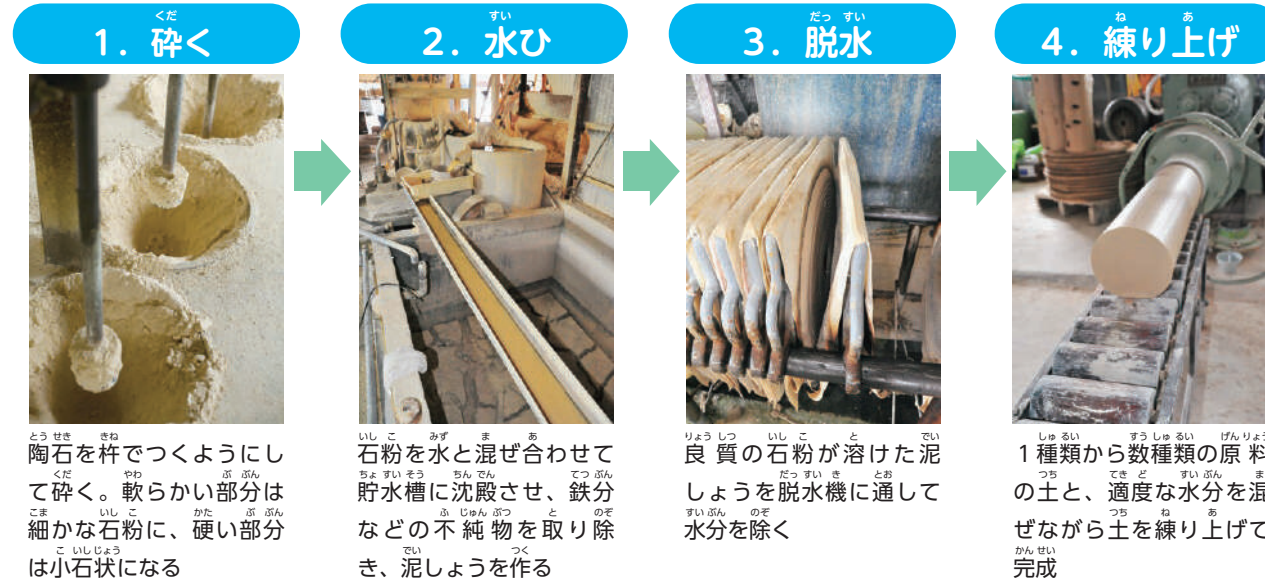
能美市九谷焼美術館長 中矢進一さんのお話



本多貞吉が花坂陶石を見つけたことは、九谷焼の発展に大きな影響を与えました。良質な原料が安定的に、大量に供給されるようになり、産業九谷の礎を築くことになったのです。さらに、加賀藩の殖産興業政策と結びついて磁器が量産化され、市民生活に直結するように広がっていったのです。花坂陶石が発見されなければ、現在のように産業化はされなかったでしょう。

むかしながらの方法で陶土をつくる

現在、花坂陶石から九谷陶土を作る工場は、小松市内では2カ所だけとなっています。その昔ながらの工程を紹介します。



素地を焼いた登窯

八幡は、現在でも九谷焼に従事する人が多く住んでいます。昭和40年（1965）ごろまで使われていた「登窯」があり、展示館として活用されています。登窯は、丘陵地の傾斜を利用して、階段状に製品を焼く部屋を連ねた窯です。1200度をこえる温度で、白磁の素地を焼いていました。当時のまま残された県内唯一の登窯であり、昭和48年（1973）に小松市指定文化財となりました。



連房式登窯

上絵付けの窯 錦窯

九谷焼の鮮やかな色をつけるための上絵付け窯を「錦窯」といいます。登窯より低温で焼く窯なので、昭和初期には町家内の工房に備え付けられて使われていました。大文字町の「錦窯展示館」や龍助町の「ジャパニヤのふるさと松雲堂」では、町家にある錦窯の様子をみることができます。窯は薪を使って焼くため、内部が二重構造になっており、製品に直接火があたらないように工夫されました。昭和40年代以降、ガスや電気の窯が使われるようになり、こうした薪窯は使われなくなっていきました。



錦窯

豆知識 花坂陶石=吸水性があり、粘土にしたときに、粘り気強いことが特徴です。

7 いしぶんか 石文化マップ



小松市の情報

位置：石川県南部
面積：371.05 km² (東西 25.5 km 南北 33.1 km)
市の木：マツ
市の花：ウメ

8 いしぶんか まな しせつ 石文化を学べる施設



《石文化の歴史を学ぶ》

○Komatsu九 (小松市観光交流センター) GALLERY & EVENT エリア内



小松市土居原町13-18
☎ 0761-58-2775
【開館時間】 7:00 ~ 22:00
【休館日】 無休
【学べること】 小松の石文化、八日市地方遺跡出土品を常時展示

○小松市埋蔵文化財センター



小松市原町ト77番地8
☎ 0761-47-5713
【開館時間】 9:00 ~ 17:00 (入館は16:30まで)
【休館日】 毎週水曜日と祝日の翌日 (当該日が祝日の場合は除く)、年末年始
【学べること】 八日市地方遺跡と出土品ほか、遺跡から出土した石文化に関すること

○小松市立加賀国府ものがたり館



小松市国府台3丁目64番地
☎ 0761-47-4533
【開館時間】 9:30 ~ 16:30 (入館は16:00まで)
【休館日】 毎週水曜日と祝日の翌日 (当該日が祝日の場合は除く)、年末年始、展示替え期間中
【学べること】 弥生時代~古代出土品、飛鳥時代の石室、国府校下の石文化

《鉱物・鉱山について学ぶ》

○里山みらい館



小松市鷺川町丙152番地
☎ 0761-58-2710
【開館時間】 9:00 ~ 15:00
【休館日】 毎週月曜日、水曜日、金曜日
【学べること】 遊泉寺銅山の歴史について

○尾小屋鉱山資料館



小松市尾小屋町力1-1
☎ 0761-67-1122
【開館時間】 9:00 ~ 17:00 (入館は16:30まで)
【休館日】 毎週水曜日と祝日の翌日 (当該日が祝日の場合は除く) 冬期休館 (12月1日~翌年3月24日まで)
【学べること】 鉱物、鉱山産業について

《九谷焼について学ぶ》

○九谷セラムミック・ラボラトリー (CERABO KUTANI)



小松市若杉町ア91番地
☎ 0761-48-4235
【開館時間】 10:00 ~ 17:00 (入館は16:30まで)
【休館日】 4月~11月水曜日、12月~3月火・水曜日、年末年始
【学べること】 製土工、九谷焼作品、絵付け体験、ろくろ体験

○松雲堂



小松市龍助町27番地
☎ 0761-23-3413 (こまつ曳山交流館)
【利用時間】 12:00 ~ 21:00
【休館日】 年末年始 (見学には予約が必要)
【学べること】 石蔵、九谷焼上絵付窯

○小松市立錦窯展示館



小松市大文字町95番地1
☎ 0761-23-2668
【開館時間】 9:00 ~ 17:00 (入館は16:30まで)
【休館日】 毎週水曜日と祝日の翌日 (当該日が土・日曜日、祝日の場合は除く)、展示替え期間中、年末年始
【学べること】 九谷焼上絵付窯、制作工程、九谷焼作品、石蔵

○小松市立登窯展示館



小松市八幡己20番地2
☎ 0761-47-2898
【開館時間】 11:00 ~ 15:00 (入館は14:30まで)
【休館日】 毎週月曜日と祝日の翌日 (当該日が祝日の場合は除く)、年末年始
【学べること】 九谷焼連房式登窯 (本焼窯)、九谷焼型物等作品、制作工程

新修 小松市史 第10巻「図説こまつの歴史」
<https://www.city.komatsu.lg.jp/soshiki/1048/shishitantou/3/2606.html> で公開中
北陸の拠点集落 八日市地方遺跡 (小松市埋蔵文化財センター)
石ころ博士入門 (全国農村教育協会)
日本遺産「珠玉と歩む物語」小松ホームページ
<https://www.komatsuguide.jp/feature/komatsu-stone>

